

中尾

話は変わりますが、最近理工系学部が敬遠されて、学生が昔より減少しているそうですが、何故でしょうか。

田中

これは「豊かさの結果」だと私は思っています。アメリカの工学系大学においても、昔は日本の優秀な学生が沢山来ていたのですが、だんだん中国、韓国、インド系の学生が増えていき、アメリカ人の学生はというと、「ウォール街で儲けよう」といった感じになってしまっている。日本はアメリカの10年20年後を追いかけているという話がありますが、だんだんそれに近づいてきたのかなと。生まれた時からテレビや遊び道具が沢山あるという豊かな環境の中で、理工系の重要性を感じ取りにくい部分があるのではないのでしょうか。

中尾

このこと、企業としても反省すべきですね。例えば、“経営”についてはMBAを取得すると収入面でもかなり優遇されていますが、技術等にも程々資格はあっても、それほどではない。アメリカではP S M (Professional Science Master) という制度があって、かなり優遇しているようです。理工、技術系の社員を十分評価していかなければ、モノづくりはうまくいかないでしょうね。

田中

おっしゃる通りですね。例えば医者には医師免許という資格があり、社会的な評価も高い訳です。技術者にもそういう社会的な仕掛けを作ること、若い学生を惹きつけるインセンティブになると思います。

中尾

理工系の学生を増やして大事にしていることは、モノづくり日本にとって不可欠であり、とても重要なことだと思います。この面で、田中理事長に大いに期待し

ています。

田中

日本は資源やエネルギーがほとんどありませんが、幸いなことに今では日本の円が国際通貨になっており、世界で通用します。それは結局モノづくりをベースとした産業力があつたからこそです。今後、我々がアジアや世界の一角でプレゼンとリーダーシップを維持していることと思えば、モノづくりを抜きにしては絶対に考えられません。それがなくなつた時に何が代わりにあるのか。私は何もないような気がするのです。これが本当の意味での日本の生命線ではないかと思えます。

中尾

モノという機械を単純にイメージしがちですが、情報もソフトもモノとみて対象を広く考えていく必要がありますね。

田中

富山に来る直前の3月に、東京の交通システムがガラリと変わりました。私鉄JR、バスが全てカード1枚で乗れるようになったんです。これも一つの“モノ”なんですね。しかし、こういうアイデアを実現するためにはただの機械技術あるいは電子技術だけではなく、ソフトの力も含めて全てを総合していかなければなりません。

中尾

私は農家の出です。第一次産業の比率が下がっていくことが、経済発展と教わってきました。しかし、これからのモノづくりのモノは、情報もソフトも含まれたものであり、農産物も当然モノです。広い見方で研究の対象を捉えて頂きたいと思えます。

田中

そういったことを維持・強化・発展するという方向に、特に工学系の単科大学である富山県立大学はもっと注力しなければなりませんし、産業界との協力が不可欠不可欠ですね。

◆窮すれば「変ず→通ず」◆

中尾

県立大学でたまに学生に講義をしますが真面目ですが少しおとなしすぎますね。それが、ときに無気力に見えたりするんです。

学長が交替する、これは大きな転機。学生達のこのようなムードを明るく、あるいは前向き、挑戦的に…、とにかくみんなで変革への努力をして頂きたいものです。そんな学風の中で、“人間性”“人間力”が養われる。そして、そのような豊かな人間性をベースにした技術者に育って欲しいな。

田中

専門科目の知識を山のように詰め込んでも、豊かな人間性のようなものがベースにあればきれいなピラミッドになるのですが、造だと非常に不安定になります。教養の先生には、ただ科目を教えるということだけではなく、人間としての教養となるところ、そこに繋がることを教えて欲しいと頼んでいます。

中尾

社内で優秀と言われる幹部を見ていても、大学でよく学び、会社に入ってから多くの知識を吸収している。それでもそれが知識のままで終わっており、身体の中で消化され、実際の仕事や研究に展開されない、創造の源になりえない、あるいは“見識”に昇華されていない、とても曖昧な言い方ですが、そんな感じがするんです。

「美しい国」と安倍首相が言っておられますが、私は以前から“美しい会社”を創ろうと言ってきました。そのためには、会社の諸システムも美しくなければならず、経営の思想そのものも美しくなければなりません。そして、もっと大切なのは社員が能力を美しく発揮していることです。そのような会社に入ってくる若い社員は、自然にそうなる。そのような社風がベースとなつてその上に技術の花が開く、道半ばですが、そんな会社になりたいと思っています。よくわかりませんが、大学もそんなんじゃないかな。

田中

そうですね。私は比較的若い時に異文化体験をすることが出来ました。大学で働き始めた当初、「世の中の役に立たないことをアカデミックと言うのだ」くらいに思い込んでいました。

しかし、ある方に「おまえは理学部じゃない、工学部だろう。世の中で我々が苦しんでいる技術的な問題に関わりを持たないでどうするんだ」と言われ、それからは色々な会社のエンジニアの方々と研究会等でお付き合いするようになりました。私にとって、これが非常に良かったと思っています。

今すぐ役に立つことも重要ですが、5年先10年先を見据えて役に立つであろうことをコツコツとやるのが大学の任務だと思います。

中尾

今のお話を伺って思い出しますのは、「窮すれば通ず」ですね。あれは中国の易経の中にあり、正しくは「窮すれば則ち変じ、変ずれば則ち通ず」です。窮している道が通ずるのではなく、窮している、真剣にもがいていると、そこに道が開けるというように理解しています。窮し方、如何にもがかが重要なことだと思います。県立大学の先生の皆さんと一緒にいがいいきましょう。

田中

一方で人材育成に関して企業の皆さんに求めたいことがあります。

昔は企業が自らの教育力に自信を持っておられました。ところがいつのまにやら世の中で“即戦力”という言い方を始めました。これは大変けしからんことだと思っています。それは企業としての教育力の喪失、あるいは経営的に教育に資金が割けなくなった。だから即戦力の人材を大学が出せ、という理屈は受け入れられたいと思っています。

大学の卒業生はその場ですぐ役に立つのではなく、企業の中である程度実務を勉強しながら、だんだんと中核的にビジネスを支えてくれるような役に立つ人材であつて、すぐ右から左ということを期待するのは間違っています。大学の人材育成はそうあるべきだと思っています。企業としても大学と連携した形で、社内の一定の教育力を維持して頂けないだろうかと思っています。

中尾

わが社でも、いろいろな部署からよく「即戦力」が欲しいと言ってきました。私は、直ちに間に合うものは、すぐに間に合わなくなると答えることにしています。すぐに役立つ本も一緒。それよりも基礎的な力を身につけた社員が、少し時間がかかっても、やがて「真の企業力」になっていくんです。

田中

ビジネスが厳しいとどうしてもそういう風潮にならざるを得ないのかもしれないと思っています。研究協会の会員同志もそして大学も研究ばかりでなく、人間の関係でも“際化”が進んでいけばいいいつも思っています。

中尾

ビジネスは5年10年先のものです。アメリカの“グローバルスタンダード”に振り回されてはいけない。古い経営と言われるかもしれませんが、目先ではなく長い目で見てその中で人材をどう育ていくか。それが日本の経営だと私は思います。

◆研究協会の役割◆

中尾

私の経営のキーワードに“際”があります。例えば、レンズ会社と当社のシステム技術で医療機械を開発する。機械の会社と当社のソフトウェアでロボットをつくるという具合です。“業際”ですね。自分の持っていないもの、異質なものとどう交わっていくか、学際的研究もありますが、県立大学と研究協会がぜひこれを進めていきたいですね。

田中

若い時に長期海外出張でイギリスのインペリアルカレッジという工学系の大学に行く機会がありました。そこにはコモンルームというのがあり、向こうではお茶の時間が午前1回、午後1回あるんですね。そこには若い人もくれば年寄りも来る、A学科の先生も来ればB学科の先生も来る。そこでお茶を飲みながら30分時間を過ごすことで、色々な意味でのすごく効果があります。学問のひらめきをそこでふつと得るといった話をよく聞きました。

中尾

社内では“世代際化”を昔から提唱してきました。50歳代の部長連中がいつも一緒にお昼をとるのではなく、ときには20歳代の若い人々と付き合う。そこに知



らず知らずのうちに何かが生まれる。今の日本の閉塞的状況を打破していくにはもっと世代際化を進めていかなければならないと思っています。研究協会の会員同志もそして大学も研究ばかりでなく、人間の関係でも“際化”が進んでいけばいいいつも思っています。

田中

色々なコミュニケーションを、閉じこもってやるのではなく、色々な人に自分がやっていることを説明することによって、刺激を与えたり、もらったりで、幅を広げることが出来ます。それがまさに人間性の幅にもつながっていくと思うんです。

あとは自分の部屋に戻って沈黙思考すると深さが出てくる。深めるのと幅を広げるのを交互にやっていくことでどんどん成長、発展していきます。

中尾

私は研究協会の基盤をもっと強固にして、大学に、学生に、そして会員企業にお役に立てるようになることを願っています。

研究協会の役割は、ひとつは会員企業の技術的な問題にお応えしていくこと、もうひとつは先生方がもっと世界に目を向け研究を深めていくことを支援していくことだと思います。さらにもっと重要なことは、経済界の強い要望もあって設立された県立大学を「我々の大学」として、物心両面にわたって支援していくことではないでしょうか。

お互い東大と富大の男声合唱団OB、そしてパートもお互いセカンドテナー、一度、一緒に歌いましょう。

田中

ありがとうございます。私達もぜひそういう新しい方向に力を合わせて進めていきたいと考えています。

大学をどう変えていくのか

—対談者—

富山県立大学 研究協会 会長
富山県立大学 学長

中尾 哲雄
田中 正人

